

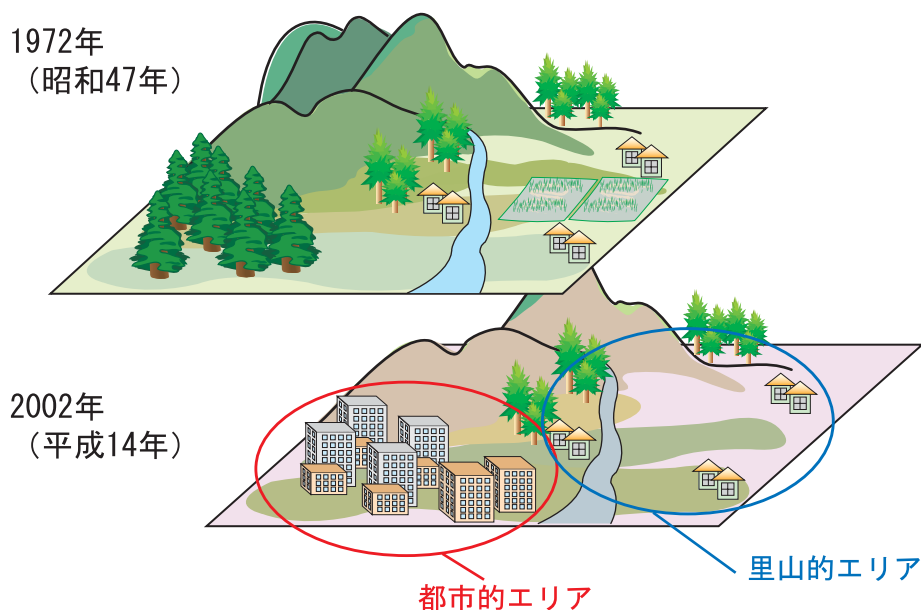
5. 人とのかかわり調査内容

5.1 景観

西部丘陵地域で大切にしたい景観は、人が昔から利用してきた里山と農地が混在する「里地・里山的景観」です。この「里地・里山的景観」を構成する景観要素がどの程度残っているのかを調べました。まず、住民が普段の生活の中で目にする樹林や草地、集落などの身近な景観要素の面積を調べました。次に、山や稜線のように、遠方から眺められてシンボリックな価値がある景観要素（ランドマーク）について、それらを眺めることができる場所（エリア）を調べました。また、地域外にある大規模な住宅地（都市景観要素）が視野に入らない場所（エリア）も調べました。

【景観要素の分布】

土地利用や植生区分図をもとに景観要素区分図を作成しました。具体的には、1972年（昭和47年）と2002年（平成14年）の国土地理院作成の地形図を比較し、以前から存在した民家を含む（山林、畑地、水田など）エリアを「里山的」、2002年の地形図で新たに住宅地になった場所を「都市的」要素のエリアとして区分し、その面積割合を算出しました。



■ 景観要素の変化のイメージ

【ランドマーク】

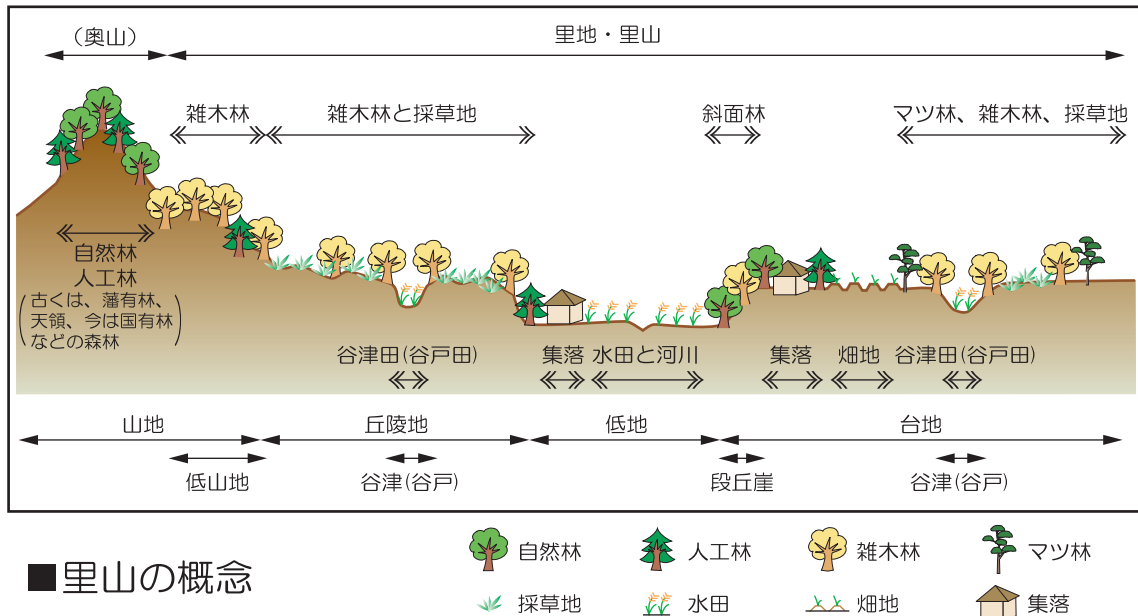
地形、ランドマークとなる主要な尾根を選定し、それを眺めることのできるエリアの面積を算出しました。

【周辺地域の都市的な景観】

調査地域周辺の都市景観要素が視界に入らない場所（エリア）の面積を算出しました。

◎典型的な里山構成要素

里山は、樹林、農地、集落の総体です。西部丘陵地域は、近年まで、図に示すような典型的な里山が維持されてきました。この本来の姿にどの程度近いか（いかに里山らしい景観が残されているか）を評価しました。図に示すような典型的な里山的な景観要素の面積割合が多ければ評価が高くなり、都市的な要素の面積割合が多ければ評価が低くなるようにしました。



■里山 の概念

土屋三郎宗遠（つちやさぶろうむねとお）

宗遠は、平安時代後期1128年（大治3年）桓武天皇の後裔で、坂東平氏の村岡五郎良文流中村荘司宗平と同じく、坂東平氏の三男として誕生し（中村荘は現在の中井町）、23歳の頃土屋郷に「開発領主」として分家し、「土屋三郎宗遠」と称しました。この宗遠が「相州土屋氏」の始祖です。土屋一族は、中村党を代表する兄の土肥次郎実平（現在の湯河原町）や、実姉桂御前の夫で三浦党の岡崎四郎義実（現在の平塚市岡崎）など、その両党は相模湾沿いの広大な領地を地盤に、強力な「相模の武士団」に成長していきました。

その後、宗遠が52歳の時、伊豆の蛭ヶ小島に配流されていた源氏の嫡流「源頼朝」を担ぎ上げ、「この世は我が世」と隆盛を誇っていた平家の打倒にその策を練り、ここに「世直し行動」（いわゆる“クーデター”）に立ち上がりました。

宗遠が残した精神的、物質的な遺産は数多くあり、熊野神社、土屋の城跡（土屋の館跡）、土屋一族の墓、大乘院、阿弥陀寺（現芳盛寺）、水呑地藏などが、今日まで伝え引き継がれています。

相州：相模の国のことで、現在の神奈川県（川崎市と横浜市の一部は除く）。



土屋城跡（土屋の館跡） 2005年12月2日撮影



土屋一族の墓 2005年12月2日撮影

5.2 人とのふれあい

西部丘陵地域で、自然と人がふれあえる場所を「人とのふれあい」として、調査しました。選んだ場所は、次のとおりです。

【人とのふれあい】

- ・ 散策路（湘南ひらつかやすらぎ回廊、関東ふれあいの道）
- ・ 展望地点（平塚八景）
- ・ 自然体験フィールド（里山をよみがえらせる会、平塚の自然を守る会などの活動場所）
- ・ 自然観察エリアとルート（アンケート調査による観察場所）
- ・ 自然とのふれあい施設（公園、緑地、青少年のための施設）



緑と文化の湘南丘陵の道
2005年6月15日撮影



里山をよみがえらせる会の活動場所
2005年6月15日撮影



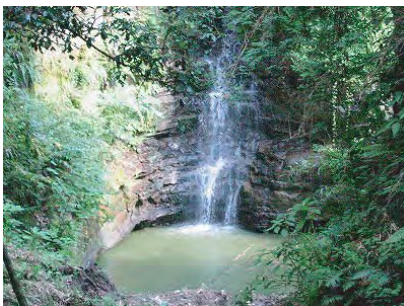
遠藤原の景観
2005年9月17日撮影

5.3 人文

西部丘陵地域で、生活文化や歴史の面から、人とのかかわりが深いと考えられるものを調査しました。選んだ項目は、次のとおりです。

【人 文】

- ・ 道祖神
- ・ 水神
- ・ 史跡
- ・ 保全樹
- ・ 指定文化財
- ・ 社寺
- ・ 湧水*⁹（ゆうすい）
- ・ 滝



尼ヶ滝 2005年7月21日撮影



松岩寺 2005年9月17日撮影



道祖神 2005年7月21日撮影

*⁹ 湧水：地中から水が自然にわき出ること。また、その水。わき水。

西部丘陵地域のお祭り

西部丘陵地域は、市内でも地域の人たちが守り育てているお祭りや講（こう）などの行事が残っている地域のひとつです。

代表的なお祭りのある神社として、土屋地区では、小熊の熊野神社、惣領分の八坂神社、吉沢地区には、上吉沢と下吉沢にそれぞれ同名の八剣（やつるぎ）神社があり、これらが代表的なものとして挙げられます。

近年は少子高齢化、勤め人の増加、青年団組織の解体などにより、お祭りの様子も変わってきています。かつては、多くの神社で神輿（みこし）が出ていましたが、担ぎ手となる氏子の減少により、神輿が出せなくなったり、人のかわりに軽トラックで神輿を運搬したり、外部の友好団体を交えて担ぐところも出てきました。

そのような中、上吉沢の八坂神社では、市内でも珍しく、現在も地元の氏子だけで神輿を担いでおり、祭り本来の姿をとどめているといえます。

土屋地区では、太鼓愛好会の太鼓連同士との交流が盛んで、お互いに宵宮（よみや：例祭の前日）に招待して演奏を行います。熊野神社でも5台の山車による太鼓が、お祭りのみどころとなっています。愛宕神社や造化神社では、軽トラックやリヤカーで神輿を運んでいます。各家の庭まで入り、各家庭で祝儀を渡す習慣が残っています。

「講」とは、信仰や経済的な理由によって結ばれた庶民の集団組織のことです。講を単位として、様々な行事が行われるため、行事のことを指す言葉のようになっています。

講には、「天神講」「地神講」「恵比寿講」「念仏講」「庚申講」「不動講」や「観音講」などがあり、信仰に基づき成立したものが多くあります。講の成立の歴史は比較的新しく、江戸時代以降であると考えられています。

講などの伝統行事の中で、地神講、地蔵念仏講、どんど焼きなどが各集落で残されています。特に吉沢地区では、かつて市内全域で行われていた大山灯籠を立てる習慣が残っており、7月末～8月末の大山の山開き期間中は、灯籠に灯を入れられた様子を見ることが出来ます。



八坂神社（上吉沢の八剣神社に合祀されている）の神輿
2004年7月10日撮影



熊野神社（土屋）の山車
2004年9月26日撮影



熊野神社（土屋）の山車の太鼓
2004年7月18日撮影



愛宕神社（土屋）の神輿
2005年4月24日撮影



大山灯籠（上吉沢）の様子
1996年8月27日撮影